

お葬式

死は人間にとって避けることのできない厳粛げんしゆくな事実である。人が死亡すると亡骸には白衣が着せられ、北枕におかれ、枕経が詠まれる。亡骸の白衣の上に刃物が一丁おかれる。これは猫が死者に近づくと死霊が猫に乗り移って猫又となり、人に害を及ぼすのでこ

れを防ぐためだといわれている。その夜は近親者によって夜伽よとぎといわれる通

夜がおこなわれる。この時に翌日の葬式の一切をとり行なう隣組の人々の役



昭和41年(1966)3月の出棺風景(小松市波佐羅町)



昭和47年(1972)の葬式での野辺送り(小松市河田町)



昭和40年(1965)の葬式での野辺送り(小松市高堂町)

割が決められ、各々分担してその準備に当たることになっていった。

棺は「下箱」とよばれた。昭和三十

年代までは座棺であったため、死者を箱に納める時には、「極楽繩」とよばれるワラ縄で亡骸の首から膝へかけて

締め付け、座高を縮めて納棺

した。昭和四十年代になると、

小松市斎場において火葬する習慣に移行了たため、これ以後は霊柩車によって運ばれる

ようになった。これにあわせて寝棺が一般的となった。小

松の在所は、ほとんどが浄土真宗門徒であるため、葬式に

読誦されるのは「正信偈」であった。棺の前には現在では

供物として果物や菓子が多く供えられるが、昔は蓮の造花

ばかりでこれを盛花といい、葬式が終わると子どもなどが

争ってこの蓮の造花を取り合ったのだが、大正に入ってから

はこの風習が絶えた。

出棺の後、葬列が火葬場に着くまでの道中、分かれ道や

四つ辻などに先頭の者が「辻

ロウソク」といわれる麻木にロウソクをつけたものを立てた。これは死者にとつての極楽道への案内標と考えられていた。火葬の翌朝は、ハイソ（灰葬）といって家族親戚の人々が火葬場で骨拾いをする。

近年、式場は寺院よりセレモニーホールが一般的となった。（高木明子）



霊柩車による火葬場への出棺(重吉葬儀社提供)



平成4年(1996)6月、解体前の三昧(小松市波佐羅町) かつては地域ごとに茶毘にふす「三昧」があった。